

歴史の中の 女たち

第33回

リディア・ゲイレル (1921～2011年)

— ボリビア初の女性大統領 —

伊藤 滋子



http://en.wikipedia.org/wiki/Lidia_Gueiler_Tejada

いまやラテンアメリカ諸国で女性大統領は決して珍しくはなく、これまでに9人を数える。最初がアルゼンチンのイサベル・ペロン大統領で、1974年、夫のドミンゴ・ペロン大統領の死去に伴い、副大統領から昇格した。そして2番目が79年にボリビアの大統領となったリディア・ゲイレルである。

リディアは1921年、ボリビアの中心にあるコチャバンバに生まれた。ドイツ人の父は早く亡くなり、母が子供の服を縫ったり、自分の住むアパートの一室を人に貸したりして彼女を育てた。テニスとロマンチックな小説や詩が大好きな、金髪で緑色の目の美少女は、家庭の事情もあり、商業学校に学んで簿記の資格を得ると市役所で出納係として働き始めた。丁度そのころチャコ戦争(32～35年)で捕虜になったパラグアイ人数人がコチャバンバに送られてきた。彼らは敵意よりもむしろ好奇の目で見られ、住居、食料のほか小遣いまで支給されており、リディアの仕事の一つはその小遣いの票を作ることだった。彼女はまだ15歳になる前だったが、母親の反対を押し切り、捕虜のひとりのハンサムな青年将校と結婚する。そして戦争が終結し彼が帰国することになると、パラグアイについて行くが、5年後、生まれた娘テレサを連れてボリビアに帰り離婚した。リディアが彼と再会したのは65年、チリに亡命する途中アスンシオンに立ち寄った時で、再婚していた彼はリディアを丁重にもてなしたが、しばらくして亡くなったという訃報がチリに届いた。

ボリビアに帰国したリディアは、幸いラパスの中央

銀行で事務員の職を得ることができた。当時働く女性は少なく、職場は男性ばかりで、厳しい上司から仕事のやり直しを命じられて拒否すると、彼は「貴女が大統領だったら別だけれど、ここでは私の命令を聞かねばならない」といわれ、のちに二人で大笑いしたという。娘を育てながらも、友人も大勢でき、映画を観に行き、女性誌を愛読するごく普通の平穏な暮らしだった。日曜日にクラブでテニスをしていると、長身で美人の彼女のプレーを見ようと人が集まってきた。

この頃大鉱山で組合活動が活発となり、それが他の産業にも波及して、1947年、彼女の職場で最初のストがあった。リディアは何のためのストなのか、それがどんな結果を惹き起すのかもよく分からないまま参加し、自分の車や家を提供した。ところがストが終わると、銀行は大勢の職員を解雇し、その中に自分も含まれていて愕然とする。たちまち生活に困った彼女は、旧知のヘルソグ大統領に泣きついた。元々軍人であると同時に医者でもあった大統領は、彼女が勤める中央銀行の専属医をしていたことがあり、リディアは彼が暖かい人柄だと言うことを知っていた。大統領のとりなしで彼女は解雇を免れたが、自分のように大統領と直談判などできない人たちのことを思うと胸が痛んだ。この時はじめて彼女のなかで、生涯続く社会正義のための戦いの火が点き、MNR(国民革命運動党)に入党した。26歳の時であった。

MNRは1942年、ビクトル・パス・エステンソロ(1907～2001年)、エルナン・シレス(14～96年)、フアン・レチン(14～2001年)、ワルテル・ゲバラ(12～96年)などによって、それまでの大鉱山主や大地主による寡占政治に反対して創設された、中産階級、労働者を中核とする政党である。リディアが入党した当時、パスは国外に亡命中で、シレスが中心になって反政府運動

を展開していた。いつもジャンパー姿で、官憲の目を逃れながら仲間を勇気づけてまわる彼に、リディアは上層部のなかでは一番親しみを覚えた。レチンとはのちに共にチリに亡命し、生涯の友となる。

リディアは女であることも忘れ、寡占政治を覆す地下運動に没頭した。のちに、自分が人生で一番輝いていたのはこの時期だったかもしれない、と回顧している。娘は寄宿舎付の学校に預け、すべてのエネルギーをその活動に注いだ。「いつ亡命や逮捕があるやもしれず、娘を手元に置いておくことはできなかった。お陰で自分は思う存分政治に打ち込むことができたが、彼女を犠牲にしてしまった」と語る。そして気がついたときには MNR の中核である、武力闘争をも厭わない最も活発なグループのリーダーとなっていた。当初は男性ばかりだったが、彼女の勧誘で党員の家族などの女性が増え、のちには女性たちが男性党員を鼓舞したくらいだ。

1949年8月、幾つかの地方都市で MNR の最初の武装蜂起があったが、ラパスでは密告によって不発に終わる。リディアは間一髪で逮捕を逃れたが、災いが及ぶのを恐れて匿ってくれる人が見つからずに苦労した。地方都市の蜂起も間もなく軍によって鎮圧された。最初の試みがこうして失敗に終わったあと、リディアたち 27 人の MNR の女性党員は、党と相談なく自分たちのイニシアチブで法務省の建物に入りこみ、亡命者や逮捕者の恩赦を求めるハンストを始めた。それは内外の反響を呼び、彼女たちを励ますメッセージの中にはエレオノール・ルーズベルト、エバ・ペロンからのものもあった。ハンストの途中、リディアは建物の柵まで出てゆき、空腹で倒れそうだったが大声をはりあげ、政府非難の演説を始めた。これが彼女にとって最初の政治演説であった。しかし 8 日間続いたハンストは次の選挙で MNR に勝利をもたらしたものの、誰ひとり釈放されず、彼女は惨めな思いをするハンストは二度とやるまいと決心する。これまで女性たちはストの時など駆り出されることはあっても主体性をもって政治活動に参加するのはボリビア社会ではかつてなかったことで、この時以来、政治を変えることに加えて、女性の尊厳や男女平等の実現が彼女の重要な活動目的となった。

1951年5月大統領選挙が実施され、MNR は 7 年間ブエノスアイレスに亡命していたパス・エステンソロを立てて勝利した。だが政府は MNR を非合法化し、パスの帰国を拒否するという過ちを犯し、それが却っ

て MNR への同情を集めることとなった。議会は最多票を集めたパスを大統領に、副大統領には次点の政府系候補を指名して妥協を図ろうとしたが、政府はパスの就任を阻止するためにアウト・ゴルベ、すなわち軍と共謀してクーデターを起こさせ、自らの政権を倒させるという手段に出た。MNR の多くの幹部がブエノスアイレスに逃れたが、国内にとどまったシレスは残った仲間を信じて行動を起こすことに決めた。そしてリディアもその仲間のひとりであった。

1952年4月9日、軍内部の同調者の手で武器庫が開かれて、市内の各所で市民や労働者に武器が配られた。そして昼ごろから軍との間で銃撃戦が始まり、彼らは 3 日間にわたる戦闘に勝利する。この間女性たちも弾が飛び交うなかで、男性と危険をともにして、負傷者を病院に運び、死者を埋葬し、連絡係を務めた。死者の数は 490 人に上った。4月11日金曜日の午後戦闘が終わると、女性たちは帰宅していったが、数人の仲間とともにだれもない政庁に残ったリディアは疲労のあまり大統領執務室のソファで眠り込んでしまった。まさか 27 年後自分がそこに座ることになるとは思いもせずに……。4月15日、シレスは急遽ブエノスアイレスから軍用機で帰国したパス・エステンソロに大統領の座を委ね、自らは副大統領に就く。その後 MNR は軍のクーデターで倒されるまでの 12 年間政権を担い、農地法や選挙法などの重要な社会改革が矢継ぎ早に行われた。

リディアは大統領府の下級の職を得たが、重要な地位を与えられた女性は一人もいず、その多くは失望して去っていった。そしてポストを得ようと大統領の周囲に群がるのは革命では何の役割も果たさなかった日和見主義者ばかりだった。党内も右派と COB (労働組合) を支持する左派とに分かれ、両者の対立は激化する。パス政権発足の翌年のこと、COB の機関紙が鉱山や工場の国有化、政府による商業の占有などを擁護する共産主義的な『基本計画』を発表すると、警戒心を抱いた右派は軍の一部と結託してパス政権を倒すクーデターを企てたが、未遂に終わる。共産主義の浸透を恐れたアメリカ大使館の関与があったのではないかと噂されたこの事件のあと、右派に属していた者は全員公職から追放された。リディアもその一人で、クーデターに加わったという証拠はなかったが、疑い深いパスは彼女をハンブルグの領事館に追いやった。

彼女は娘テレサを連れて 1953年4月、ブエノスアイレスから船でヨーロッパに向かった。ドイツでの生

活は戦後の復興ぶりから学ぶことが多く、特に戦中、戦後の女性の働きぶりは印象深かったが、領事館の仕事は単調で、すぐにボンの大使館に転勤を願い出る。お陰で臨時大使をしたときなど、ドイツの大統領や外務大臣と会える機会も得たが、彼女はこの仕事を通じて、自分の居場所は政治以外にはないことを痛感した。

3年後ようやく帰国が許され、MNR からラパス市役所の事務局長の職が与えられた。満足できる役職ではなかったが、党はまだ女性を責任ある地位につけるほど意識改革はされておらず、その意味では革新政党とはいいながら保守党となんら変りなかった。

その数ヵ月後の1956年7月、シレスが大統領に選出された。この選挙は先住民、女性、字が読めない人々が初めて投票権を得て民主政治に参加した記念すべき選挙であった。リディアはMNRから下院議員として立候補し、かろうじて繰り上げ当選することができた。

理想に燃えて議員になった彼女がまず立ち向かったのが汚職の撲滅だった。そして議員になる前と後の財産の開示を提議したが、それはほとんどの議員にとって都合の悪いことだったとみえ、ありとあらゆる妨害が起こる。また、政府に法外な値段でトラクターを購入させようとする汚職を下院に告発するがすべての議員から無視され、多額の外貨が支払われて商品は何事もなかったかのように納入された。この時ただひとり彼女を支持した議員がいて、二人の間に友情が芽生え、結婚に至るが、労働組合出身の彼の左翼思想とは相容れず、間もなく離婚する。その後も二人は議会内では協力しあったが彼は早逝した。それからも汚職成金の高級車や立派な屋敷が、ラパスだけでなく、マイアミやブエノスアイレスにまで増え続けた。折しも、グアテマラにおける革命の進行を危惧した米国政府はMNRを反共の防波堤とするために多額の援助を行っていた時期であった。

リディアは1959年下院議員の任期が終わると、農民問題省の長官となり農地改革に携わった。役人の仕事には限界があり先住民農民の状況を劇的に変えることは不可能だったが、実態をつぶさに知り、血の通う行政を行うことに努めた。63年再び下院議員に当選す

る。

1960年にシレス大統領の後を継いだパスが大統領を務めた4年間にMNRは右傾化し、当初の革命意欲を喪失していた。失望したシレス、レチン、ゲバラら創設以来の幹部はパスと袂を分かち、党は分裂した。64年8月に発足した第3次パス政権は弱体化した基盤を補強するため軍の支持を得ようとして、副大統領にパリエントス将軍を迎えた。しかしそれは羊の群れの中に狼を招き入れたようなもので、早くも3か月後には周到に計画された無血クーデターによりパス政権は倒され52年革命は終焉、長い軍事政権の時代が始まる。同じ現象はボリビアばかりではなくラテンアメリカ諸国のあちこちで見られた。パスをはじめ多くの政治家が国外に追放され、リディアはチリに行き、先に追放されていたレチンと合流する。亡命生活は15年近くにも及ぶが、彼女はの間娘との家庭生活を楽しむことができた。

帰国したりディアは1979年の選挙で下院議員に選出された。彼女は亡命中、レチンが創設した政党に属していたが、この時はパスの党再建の呼びかけに応じて、MNRに戻って立候補した。党が一本化すべき時と判断した彼女はレチンにもそうさせようと説得したが、彼は応じなかった。大統領選ではシレスが僅差でパスに勝つが、双方とも譲らず、第三位のバンセル



1952年4月の民衆蜂起
<http://www.izquierdasocialista.org.ar/cgi-bin/elsocialista.cgi?es=218¬a=18>

元軍事政権大統領の仲介でMNRの創設者のひとり、ゲバラが1年間だけ臨時大統領に就くことになった。そしてリディアは下院議長に任命された。しかしゲバラ政権は3か月もたたないうちに、死者の数が300人を越えたクーデターで倒される。だが軍部に対する激しい抵抗は2週間たっても収まらず、16日後軍はとうとう議会に臨時大統領の選出を要請した。そして軍と各政党の間の調整役として奔走していたリディアが大統領に指名された。軍は女性なら御しやすいと考えてその案を受け入れたようだ。

1979年11月16日リディアは臨時大統領に就任した。58歳の時である。任期は次の選挙で選出される大統領が就任する翌年8月6日までと決まっていた。彼女は軍部の嫌がらせ、政党や議会の不協力など四面楚歌のなかで、限られた時間にできるだけ成果を上げ、

無事に次に選出される大統領に政権を引き渡すべく、真摯に大統領職に取り組んだ。そして80年6月の選挙では予想どおりシレスが圧勝した。それは前回の選挙におけるパスの行動がクーデターを引き起こしたことに対する批判票であった。しかし何としてもシレスの大統領就任を阻止したいガルシア・メサ將軍は7月17日、アルゼンチン軍部も加担した流血クーデターを起こしてリディアに辞表を強要し、彼女を娘が住んでいたパリに送り出した。リディアはその後チリに移り、そこで2度目の亡命生活を送った。

1982年ようやく民政移管がなされて、リマに亡命し

ていたシレスが大統領に就任するために帰国、18年に及ぶ軍事政権が幕を閉じた。チリから帰国したリディアはその後、コロンビア大使、上院議員、ベネズエラ大使などを歴任し、晩年は政界から身を引いたが、女性の地位向上には常に熱心であった。2011年89歳で死去する。

ガルシア・メサ將軍は1995年、亡命先のブラジルからボリビアに引き渡され、人権侵害の罪で30年の刑に服役中である。

(いとう しげこ)

ラテンアメリカ参考図書案内



『遊牧・移牧・定牧 -モンゴル・チベット・ヒマラヤ・アンデスのフィールドワークから』

稲村 哲也 ナカニシヤ出版 2014年3月 390頁 3,500円+税

アンデス、ヒマラヤ、チベット高地やモンゴルなどで、約40年間牧畜社会・文化の現地調査を続けてきた文化人類学者（愛知県立大学、現放送大学教授）の研究成果の紀行記風集大成。牧畜の事例を遊牧、移牧、そして中央アンデスのリヤマ等の定牧の形態別に、それぞれの実態と牧民の生活、変化を述べ、アンデスでのビクーニャを捕らえ毛を刈った後放つ「殺さない狩猟 チャク」を、先人の自然との共生・利用の知恵として紹介している。

これらフィールド調査に基づき、モンゴルとチベットの遊牧の比較、移農との関連、水平移動が典型である遊牧と規則的な上下移動の移牧との間は境界線が引けないこと、アンデスの定牧・移農も東と西で差異があることなど新たな牧畜論を論じている。さらに市場経済化や家族・地域社会ネットワークの変化への適応、伝統的な交易の衰退、さらにテロリストとの内戦等の社会変革や民主化と市場経済移行が、これまでの牧畜社会での互酬・再分配・市場交換システムを新たな再分配の仕組みへ変える動きがあると指摘する。

〔桜井 敏浩〕